

コザ（沖縄市）のロック・ミュージシャン

木村 俊介

2002年9月17日から24日までの1週間、沖縄県コザ（沖縄市）で、沖縄における米軍基地周辺の音楽文化に関して調査を行なった。沖縄は、敗戦から1972年の本土返還までアメリカ合衆国の植民地であり、その後も米軍基地が存在し続け、本土とは異なる文化を形成してきた。米兵は明らかに沖縄の人々に差別意識を持っており、支配、被支配の対立がある。現在は嘉手納基地だけになっているが、本土返還以前は基地の中心部にコザの街があるという状態であった。コザは沖縄本島中部に位置し、国道330号線と嘉手納米軍基地へと向かう空港通りが交差する胡屋十字路を中心として繁華街が形成されている。コザ中心

街には、2つのレコード店、10店舗以上ライブ・ハウスがある。（地図1）

コザのロックの歴史は、1965年のベトナム戦争から始まる。沖縄の地元ミュージシャンが米兵相手のクラブや基地内で演奏をし、本土とは異なるロック音楽文化が発達した。むしろ、コザでロックが栄えたのは基地の街であったからこそといえよう。ベトナム戦争期のロックの主流は、アメリカの黒人のブルーズに白人が独自の解釈を加えたハード・ロックとよばれるジャンルであった。最前線からきた兵士の要求に応えることが重要であり、当時の英米で流行したロックのコピーが中心であった。兵士は半年サイクルで入れ替



地図1 コザの中心街（2002年9月現在）

わり、音楽的嗜好も異なるので、ミュージシャンには多彩なレパートリーが必要とされた。

今回の調査では、コザにあるいくつかのライブ・ハウスで活動するミュージシャンにインタビューを行なった。インタビューにご協力いただいた方々、その関係者を紹介する。



写真1 川満勝弘氏（2002年9月）

川満勝弘氏（写真1）は、1970年代、コンディション・グリーン（Condition Green）のヴォーカルとして活躍した。コンディション・グリーンは、派手なパフォーマンスを売り物とするショー・バンドであった。コンディション・グリーン解散後、1990年頃に勝ちちゃんバンドを結成し、メンバー・チェンジを繰り返しながら現在に



写真2 下地健一氏（2002年9月）

至る。

下地健一氏（写真2）は、現在の勝ちちゃんバンドのギタリストである。



写真3 宮永英一氏（2002年9月）

宮永英一氏（写真3）は、1970年代に紫、コンディション・グリーンなどのドラム奏者として活躍した。1973年に紫に加入、翌年脱退し、コンディション・グリーンに約一年間在籍するも、1975年紫に再加入、1978年バンドが解散するまで在籍した。紫は、コンディション・グリーンとは対照的に音楽を主体としたハード・ロック・バンドであった。1980年代からはヴォーカル、和太鼓奏者としても活動を始め、現在ではソロ・ユニットの琉球マジックという活動を中心に行なっている。



写真4 宮永英一氏が琉球マジックで使用する和太鼓（2002年9月）



写真5 琉球マジックのリハーサル中の宮永英一氏 (2002年9月)

琉球マジックは、彼自身の考案した独特の編成を持つ和太鼓（写真4・5）と琉球の言葉、英語、日本語を混合した歌詞、ロックという範疇では収まらない琉球音楽、島唄とのコラボレーションを目的としたユニットである。また、2000年、元紫のキーボード奏者であるジョージ紫氏と共に紫（NEW紫）を新たに結成した。彼ら以外には、ジョージ紫氏の2人の息子と佐藤圭一氏らによって構成されている。1970年代当時ドラム奏者であった宮永氏は、ヴォーカリストとして参加している。ジョージ紫氏の2人の息子は、この他に8BALLというバンドにも加入している。

龍賢治氏は、ヴェトナム戦争期に沖縄に滞在した元米軍兵士で、1970年代に紫やコンディション・グリーンのライブを見ている。彼は母親の血筋が沖縄の元アメリカ人で、現在は日本に帰化している。また、彼とは2002年の10月に東京で行われた宮永英一氏のライブで出会い、インタビューは11月上旬に浦安で行なった。

現在のコザ周辺で活動するバンドの形態は、次の5つのパターンに集約されると思われる。

- ①本土でのメジャー・デビューを目指すバンド（10代から20代）
- ②オキナワ・ロック第1世代のみで構成され

るバンド（40代以上）

- ③若い世代のみで構成されるバンド（30代前半以下）
- ④世代の混合（②+③）
- ⑤アメリカ人（米兵、及び民間人）から構成されるバンド

①このパターンのバンドは、本土での活動を念頭においており、歌詞は基本的に日本語であり、米兵相手ではない。レコード店に紹介された2つのバンドのCDを聴いた印象は、ロック、ポップス、ヒップ・ホップ（ラップ）を混合したサウンドであり、現在の日本のポピュラー音楽シーンの流行のスタイルに影響を受けていると感じた。

②このパターンのバンドは、少なくとも1970年代初頭からミュージシャンとして活動を続けている。例えばJETというバンドは、彼らがロックに目覚めた時期の流行のスタイル、ハード・ロック色が強いといえよう。

③このパターンに属するバンドとして、8BALLが挙げられる。そのサウンドは、彼らがロックを始めた時期にあたる1980年代から90年代初頭のヘヴィ・メタルの1つのスタイル、テクニカルなロック、例えばイングヴェイ・マルムスティーンやミスター・ビッグを想起させるものである。このパターンは、コザの中で最も少ない形態である。勝ちちゃんバンドのギタリスト、下地健一氏は次のように述べた。「若い人はアメリカ人を相手にするよりも本土に目が向いており、①のパターンで活動するものが多い。また、米兵相手の演奏はベテラン勢が大きなシェアを握っており、そこに入っていくことに怖いイメージを持っているのではないか。」

④このパターンは、オキナワ・ロック第1世代と若い世代が混合されたバンドである。下

地健一氏は、世代の混合という意味では島唄と同じ感覚があるのではないかと述べた。例えば、1970年代に精力的に活動した元コンディション・グリーンのヴォーカリスト、川満勝弘氏が率いる勝ちちゃんバンドのメンバーは、彼以外は20代から40代のミュージシャンによって構成されている。このパターンの特徴は、バンドの主導権を第1世代が握っていることにあるだろう。多くの場合、演奏されるカバー曲は、1960年代から70年代のロックの古典ともされる曲がほとんどである。例えば、勝ちちゃんバンドは、ピンク・フロイドの「シャイン・オン・ユー・クレイジー・ダイヤモンド」やプロコル・ハルムの「青い影」を、紫は、カンサスの「キャリー・オン・ウェイワード・サン」やディープ・パープルの「ハイウェイ・スター」などを演奏していた。ちなみに、ヴェトナム戦争期に沖縄に滞在した元米軍兵士、龍賢治氏は、「青い影」が演奏されると店内で喧嘩をしていた人々が落ち着きを取り戻して聴き入ったと、述べた。

⑤このパターンは、下地健一氏から話には聞いていたが、今回の滞在では、時間の制限から実際には調査することが出来なかった。

まず、今回の沖縄滞在中に長時間協力して頂いた宮永英一氏のインタビューを以下にまとめておく。彼は、常に身近にあった琉球音楽の魅力に、欧米のハード・ロックに陶醉していた1970年代には気付かなかったという。琉球マジックは、薩摩藩が琉球王国を侵略した時期から現在まで、支配されることに慣れ、日本本土から援助を受けることに慣れ、自分で創造する力を失ってしまった琉球の人々に、世界平和のメッセージを発信する使命を喚起することを目的としている。ロックと琉球音楽の融合は早くも紫の時代に、島唄「なんた浜」の旋律を取り入れた「マザー・ネイチャーズ・プライト」¹⁾にという曲で行っている。

沖縄のTV放送終了時に流される「なんた浜」には、時間が終わってしまうというイメージがあり、そうした雰囲気楽曲に取り入れたのだという。琉球音楽との融合に本格的に取り組んだのは、1985年頃からであるとのことである。

ヴェトナム戦争期に沖縄に滞在した元米軍兵士、龍賢治氏のインタビューを以下にまとめておく。彼は、コザにおいて、紫以外に印象に残るバンドは無く、他のバンドは皆同じで、紫ほどの個性を感じなかったという。店に白人兵士がいない時に宮永英一氏が歌った、おそらく演奏者本人は覚えていないかもしれない日本語のバラードが最も印象的で、こうした紫との出会いがヴェトナムで戦死する覚悟を変えさせ、生き残る決意につながったという。補足すると、現在入手できる1970年代に発売された2枚の紫のアルバムはすべて英語であり、先行研究にもそのような事実に関する記述はない。また、彼は沖縄以外に一時期東京にも滞在しており、東京の人間にオープン・リール式テープ・レコーダーで現地録音した紫のライブを聴かせたという。これは、紫が本土デビューする以前の話であり、彼は、本土に最初に紫を紹介した人物ではないかと自負している。

2002年9月から11月のフィールド・ワークに先立って、太平洋戦争後、沖縄に米軍が駐留してからのコザの生活史と音楽文化を詳述した先行研究²⁾を大いに活用した。しかしそこには、1990年前後までのコザのロックの状況は記されているが、その後、約10年間の様子は記されていない。今回のフィールドでは、主に現在の状況を把握することを目的としていたが、再調査に出かけた際には、今回調査が出来なかったライブ・ハウスをまわる予定である。

注

1) 紫 1976 b

2) 沖縄国際大学石原昌家ゼミナール編 1994

参照文献

DeMusik Inter. 編 1998 『音の力〈沖縄〉コザ
沸騰篇』 インパクト出版会

沖縄国際大学石原昌家ゼミナール編 1994 『戦
後コザにおける民衆生活と音楽文化』
榕樹社

沖縄市役所 1998 『沖縄市史資料集・4 ロッ
クとコザ（改訂版）』 那覇出版社

高村真琴 2000 『沖縄チャーステイストーリー
コザに抱かれて眠りたい……zzz』 ボー
ダーインク

ハンズ・コム編 2002 『ハンズ』2002年7月
号、特集：Okinawa Band Revolution 118、
pp.26-43 ハンズ・コム

参照音源

HY 2002 『デイパーチャー』CLCD-20001 ク
ライマックス・エンターテイメント

8 BALL 2002 『Prototype』RKT-1001 レモン・
ロケット・レコーズ

オレンジレンジ 2002 『オレンジボール』
DMS-001 スパイス・レコーズ

コンディション・グリーン 1978 『Life Of
Change』1994再版、POCCA-00681 ポニ
ーキャニオン

コンディション・グリーン 1979 『Mixed-Up』
1994再版、POCCA-00682 ポニーキャニ
オン

宮永英一 2002 『Wake Up! 琉球』KOKU3-0042
ZODIAC エンタープライズ

紫 1976 a 『紫』1999再版、TKCA-71748バー
ボン

紫 1976 b 『Impact』1999再版、TKCA-71749
バーボン

紫 1983 『Murasaki Why Now…?/Peaceful Love
Rock Concert』1995再版、VICL-18180
インヴェイテーション